

Analysis of 6 wanderers with dementia of Alzheimer type using 24-hour behavioral observation

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2017-10-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Sugano, Keiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/19519

博士論文審査結果報告書

学位授与番号 医博甲第 1957 号

学籍番号

氏 名 菅野 圭子

論文審査員

主 査 (職名) 生田 宗博 教授

副 査 (職名) 能登谷 晶子 教授

副 査 (職名) 少作 隆子 教授

論文題名 Analysis of 6 wanderers with dementia of Alzheimer type using 24-hour behavioral observation

論文審査結果

徘徊の原因を器質的要因から探る研究は多いが、徘徊者の言葉や行動から誘因を探る研究は少ない。本研究の目的は、徘徊者の行動観察から徘徊はどのように起こるか、その動作・行為特徴は何かを明らかにし、徘徊者はなぜ徘徊するのか探知する事にある。施設入所し徘徊する DAT 患者 6 名を 24 時間ビデオ撮影し、5 秒単位の生活時間を、施設内活動 17 種（就眠、排泄、食事など）と、同時に対象者が取った体位・移動を 8 種（歩行、立位など）に各々分け、その関連性を調べた。各生活時間に伴う体位・移動以外の動作・行為から、歩行にいたる意味が類推できた明瞭歩行以外の、徘徊と示せた「不明歩行」、「不明歩行+立位」、「不明歩行+立位+不明歩行の連続」の 3 形の内、従来言われてきた徘徊と同意の、不明歩行について直前の状況から、不明歩行における徘徊発生の背景を探った。さらに生活時間区分の、自由時間、食事、排泄、バイタルチェックと、体操・レクリエーション・作業療法・お手伝いから 2 種、計 6 種の 24 時間に占める比率で時間を算定し、合計が 1 時間となるように各 6 種の分析時間を圧縮し、この時の不明歩行あるいは明瞭歩行に、目的事物あるいは他者の関与などが行われたかを分析した。不明歩行の累積時間は平均 1 時間 30 分であり、不明歩行は自由時間で発生しやすく、作業療法や食事で発生しにくいなど生活時間との関連性がみられた。作業療法や食事が「与えられた課題をこなす」である一方、不明歩行の多い自由時間では「身体・物を触る、いじる」「なし」と、対象者が能力の範囲内で各生活時間に応じ動作・行為を選択したと考えられた。また、明瞭歩行には目的性が明瞭であった一方、不明歩行の時は自分の身体や手近に現れる物品を触れ、周囲を眺めるなど、両者に質的違いがあった。しかし、徘徊直前に多い「身体・物を触る、いじる」は行うべき課題や他者との交流の欠落の補完であり、続いて発生する徘徊は退屈への対処行動と類推できた。

以上より本論は、歩行のうち発現の誘因が解釈できる明瞭歩行以外の、立位と不明歩行の組み合わせが徘徊と指摘できた事、そして徘徊が退屈への対処行動と類推できた事から、今後は、有目的や他者との意味ある内容の活動・時間を、作業療法で適切に設定し提供する事で、無為になる徘徊の予防・低減の可能性を開くものであり、博士(保健学)の学位に相当すると判定できた。